

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教育学 ）	氏名	吉岡 真梨子
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論 文 題 目 送り手の性役割期待を内包する言葉かけが受け手に与える影響			
論文審査担当者 主 査 教授 井上 弥 審査委員 教授 山内 規嗣 審査委員 教授 伊藤 圭子 審査委員 教授 児玉真樹子			
〔論文審査の要旨〕 本論文は、送り手の性役割観に基づき受け手に対してジェンダー・ステレオタイプを期待するものでありながら性役割の期待であることが明示されない言葉かけを、暗黙の性役割期待を内包する言葉かけとし、暗黙の性役割期待を内包する言葉かけの影響を青年期の受け手の自己呈示およびパフォーマンスの側面から検討したものである。その際、受け手の性役割観や発達段階、性別による影響の違いについても検討している。性役割に関する先行研究では、伝統的性役割期待を受けた場合は伝統的な自己呈示を行い、逆に非伝統的性役割期待を受けた場合は非伝統的な自己呈示を行うことが明らかにされてきた。しかし、相手の伝統的性役割期待が容認できない場合に非伝統的性役割に立った自己呈示を行う可能性があること、刺激人物の性役割観や実験参加者の性別を強調した明示的な性役割期待の呈示に限定されていること、児童期から青年期にかけて受動的な性役割取得から主体的能動的な性役割学習へと変化が生じることが考慮されていなかった。それを踏まえ本論文では、性役割学習への移行期にある青年期前期とより主体的能動的な性役割学習段階にある青年期後期の男女を対象として、暗黙の性役割期待を内包する言葉かけが受け手の自己呈示およびパフォーマンスに及ぼす影響を明らかにしている。また、受け手の伝統的性役割観によって自己呈示に差がみられるかも検討している。 本論文は3つの章から構成されている。 第1章では、学校現場においてみられる性役割期待を含む言葉かけと性役割学習についてこれまでの研究を概観し、性役割期待が自己呈示に影響を及ぼす可能性について論じている。従来の研究では明示的な性役割期待の影響が検討されていること、言葉かけの影響を検討するには受け手自身のもつ受容範囲を考慮する必要があることを述べている。また、受け手に対して潜在的にステレオタイプを伝える好意的性差別の研究から、暗黙のうちに伝えられる性役割期待が自己呈示およびパフォーマンスへ及ぼす影響を検討することの必要性を論じている。そして、性役割の発達の観点から、発達段階や性別により影響が異なる可能性のあること、特に同年代の異性からの性役割期待が性役割に関する自己呈示に影響していることを述べている。 第2章では、暗黙の性役割期待を内包する言葉かけが、青年期前期、後期の男女の自己呈示とパフォーマンスに与える影響を明らかにするため、調査協力者の性別と一致する性別の性役割期待を伝統的性役割期待、一致しない性別の性役割期待を非伝統的性役割期待として、暗黙			

の性役割期待が、男性、女性役割特性、人間性の3側面の自己呈示に及ぼす影響について4つの実証的研究を行っている。第1節では、青年期前期の中学生を対象として、暗黙の性役割期待を内包する言葉かけが自己呈示に与える影響を検討している。女子中学生は、非伝統的な性役割期待を受けるとその期待に沿った特性を呈示しやすいが、男子中学生は期待に沿った性役割特性を呈示しないことが明らかにされている。すべての性役割特性において、男子中学生は女子中学生よりも呈示得点が低く、性役割条件の間に差がみられないことから、性役割が未分化な状態にあることが呈示に表れていると考察されている。第2節では、青年期後期の大学生を対象として、女子大学生は送り手の性役割期待に沿うような性役割特性を呈示するが、男子大学生は伝統的な男性役割に縛られ、女性役割特性を呈示しないことが明らかにされている。また、非伝統的な性役割を期待された場合、伝統的な性役割観が高い方が男性役割特性を呈示することが示されている。第3節では、暗黙の性役割期待が自己呈示に及ぼす影響の発達段階による差を検討している。男性において、大学生がより男性役割特性を呈示するという発達段階による差が明らかにされている。中学生で性役割学習の段階にいる女性に比べると、男性は、中学生では性役割取得の段階にあり、性役割学習への移行が遅いため発達段階による差がみられたと考察している。また、ニュートラルな特性である人間性の呈示で、非伝統的な性役割期待を受けた男性における発達段階差や、非伝統的な性役割期待を受けた中学生における性差がみられている。このことから人間性が印象調整に重要な役割を果たす可能性が示唆されている。第4節では、大学生を対象として実験を行い、暗黙の性役割期待を内包する言葉かけが自己呈示やパフォーマンスに及ぼす影響を検討している。そして、伝統的な性役割観の高い女性は、男性役割特性を新たな女性役割特性として取り込み、主体的かつ積極的に男性役割特性を呈示する可能性が示唆されている。また、暗黙の性役割期待を内包する言葉かけによってパフォーマンス低下が起こる可能性が示され、パフォーマンス課題の性質や必要とされる能力によってその影響は異なることが示唆されている。

第3章では、第2章の実証的な研究結果に基づき、暗黙の性役割期待を内包する言葉かけが自己呈示とパフォーマンスに与える影響について、伝統的な性役割観の高さや発達段階、性別による差を含め、総合的に考察している。女性は、周囲からの影響を受けやすい反面、柔軟に性役割を呈示することができること、その一方で、男性は、発達段階による差が大きく、女性役割を受容しにくいことを示した。また、今後男性も対象として暗黙の性役割期待の影響を検討していくことの必要性を言及している。

本論文は、以下の3点において高く評価することができる。(1) 暗黙の性役割期待を内包する言葉かけが受け手の性役割に関する自己呈示に影響することを明らかにしたこと、(2) その影響は、受け手の性役割観や発達段階、性別によって異なることを明らかにしたこと、(3) 多面的な性役割特性に関する呈示を検討していく必要性を示したことの3点である。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与されるに十分な資格があるものと認められる。

令和2年2月12日